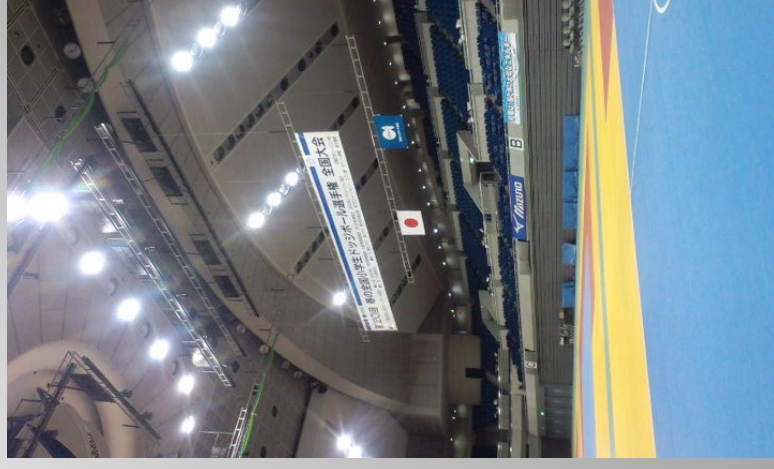


# SEED 2013



一般財団法人日本ドッジボール協会 2013年度経営戦略概要

# はじめに

長期戦略「**NEXT10**」の基盤整備が一步一歩進んでいます。

**NEXT10**は3年目を迎え、**整備期から安定期へ**と向かいます。

これまでに、日体協への加盟申請、新たな協賛企業の発掘、指導者育成制度の創設に向けた準備、社会人大会の開催、普及活動プログラムの開発などを手がけてきました。今年度は、諸事業を軌道に乗せることがミッションとなります。

我々はこの2年間、土づくりに精を出し、新しい種をようやく手に入れることができました。これからその種をまき水をやり手間ひまをかけて成長を見守っていく時期に入ります。

戦略を実行するにあたり、志を同じくする仲間の力を得なければなりません。

加盟団体、指導者、選手、保護者の理解は不可欠だと考えます。我々には**発信力の向上と連携強化**が必要です。**NEXT10**の達成に向け、我々は勇気と決断力をもって前進します。

2013年経営戦略コードは「**SEED**」（種）。

希望の種を蒔き、ともに未来を語る時が訪れました。

# ドッジボールをめぐる現状

## 少子化や趣味の多様化による、競技人口の減少

文部科学省「学校基本調査」によると、2012年**全国で年間12万人の小学生が減少**しています。過去10年で最も減少数が大きくなっています。スポーツ人口も同様です。総務省統計局の調査によると、国民のスポーツ実施率は10年前に比べ低下しています。笹川スポーツ財団の調査では、成人の週1回の運動・スポーツ実施率は上昇している（2000年:37.2%→2009年:45.3%）にもかかわらず、実施率が伸びていないのはウォーキング、ジョギング、筋肉トレーニングなどの「エクササイズ」種目です。**競技系スポーツで上昇しているのはサッカー、バスケットボールなどごく一部**でした。また、笹川スポーツ財団の「子どもスポーツライフ・データ2012」によれば、4～9才の幼児・児童のうち5%がまったく運動を行っていないことも明らかになりました。いわゆる「**運動・スポーツ実施の二極化**」傾向が進んでいることを裏付けています。

## 小学生のチーム数減少

前年度チーム登録数は1081（D-1, D-1G）。今年度は985。1年で約100チームが減少したことになります。減少傾向に歯止めがかかっていないことが明らかになっています。

985チームのうち、女子単独チーム（D-1G）は120チーム余りで、全体の1割程度です。

## 幼児や青年の参加率が向上

一方で、幼稚園児が参加するドッジボール大会や学生が中心となって開かれる大会が全国で増加傾向にあります。幼児については、スポーツクラブ、幼稚園が主催する大会が各地で開催され、神奈川県内では54チーム、1200名が参加する大規模な大会も開催されています。一方、青年では、ナゴヤドーム、福岡ドームにおいて大規模な大会が開催され（地元協会が協力）、参加数が年々増加傾向にあります。



SEED2013の戦略

# 育てる

NEXT10の最重要課題は、  
**人材育成**です。

我々は、優れた知見と経験をもつ**指導者**を養成するとともに、心身ともに健全で地域社会に貢献することのできる**競技者**を育成します。  
これこそが普及と振興の近道であると考えます。





ドッジボールにおけるクラブ運営は、  
家族や地域を基盤とする、  
「コミュニティ」型が多い。

少子化に歯止めがかからない状況の中で  
競技者を確保することは大変厳しいと言えるが、  
コミュニティに直接入り込み、  
地域貢献するクラブこそが支持される。

ドッジボールクラブの存在意義は、  
まさに「地域との共存、地域への貢献」である。



生涯にわたって競技することのできる環境を  
作るこそ協会使命である。

一般力テゴリーの創設、  
個人登録制度に寄る

競技者のコミュニティ構築により、

「いつでも、どこでも、だれとでも、いつまでも」  
を具現化する。



競技者を直接的に支えるのは、指導者（監督、コーチ）である。

指導者は、地域や保護者と連携し、競技者を育成することが求められている。  
**地域社会は信頼できる指導者を必要としている。**

JDBAは、正しい見識と知識、経験をもつ指導者を育成するため、新たな制度を構築する。  
**「公認指導者制度」**



競技力向上を陰で支える審判員の存在は非常に大きい。他競技においても日本人の繊細で緻密なジャッジが評価されるように、ドッジボールのジャッジ技術は極めて高く、アジア諸国の評価も高い。**審判のスキルアップと切磋琢磨が必要**であることは言うまでもない。



ドッジボールにおけるクラブ運営は、家族や地域を基盤とする、「コミュニティ」型が多い。

少子化に歯止めがかからない状況の中で競技者を確保することは大変厳しいと言え  
るが、コミュニティに直接入り込み、地域貢献するクラブこそが支持される。

ドッジボールクラブの存在意義は、まさに「地域との共存、地域への貢献」である。

## 競技者

生涯にわたって競技することのできる環境を作るこそこそ協会の使命である。

一般カテゴリーの創設、個人登録制度に寄る競技者のコミュニティ構築により、「いつでも、どこでも、だれとでも、いつまでも」を具現化する。

競技者を直接的に支えるのは、指導者（監督、コーチ）である。指導者は、地域や保護者と連携し、競技者を育成することが求められている。地域社会は信頼できる指導者を必要としている。

JDBAは、正しい見識と知識、経験をもつ指導者を育成するため、新たな制度を構築する。

## 指導者

競技力向上を陰で支える審判員の存在は非常に大きい。他競技においても日本人の繊細で緻密なジャッジが評価されるように、ドッジボールのジャッジ技術は極めて高く、アジア諸国の評価も高い。審判のスキルアップと切磋琢磨が必要であることは言うまでもない。

## 審判員

# 普及 振興

すべてが協会を支える「**会員**」。

# SEED 2013 基本戦略

## 「今年度中に推進します」

### 1 シニア（青年）の新規加入促進

2013年度は**シニアカテゴリーを新設**する。これは、児童生徒の卒業後の活動機会を保障する制度となる。現在全国で100チーム以上が活動しているといわれ、年々その数は増加している。主催大会を増やしチーム主催大会を支援すること、初心者でも参加しやすいルールやしぎゅレーションで新規加入者を獲得する。

担当：事業委員会（学生チーム）

### 2 クラブ等と連携した**勧誘行動**

小学生カテゴリーの減少傾向を食い止めるため、各クラブの勧誘行動を支援する。

**「おやこドッジする」をクラブ単位で開催**し、低学年児童を中心に新規加入者を勧誘する。  
勧誘行動の導入事例をホームページ等で公開し、情報共有を図るほか、各種講習会において情報提供を行う。

担当：普及委員会

# SEED 2013 基本戦略

## 「3年以内に始めます」

- 1 **幼児期からの一貫指導体制**を構築する  
幼児の運動・スポーツ離れが進んでいることを踏まえ、各クラブにおいて幼児への「運動遊び・ボール遊び」の指導を推奨する。
- 2 **優れた指導者の発掘と育成**を推進する  
公認指導者を養成し、地域のスポーツ振興に寄与することで、安定した競技者獲得とクラブ運営を可能にする。
- 3 **柔軟なスタイルでの楽しみ方**を提案する  
主に成人を対象に、従来のルールやレギュレーションにとられない新しいスタイルでの楽しみ方を提案し、ドッジボールへの関心を高め、新たな愛好者を発掘する。

## 「JDBA公認指導者制度」発足準備

健全な青少年の育成に、確かな知識と経験をもつ指導者の存在は今や必要不可欠である。

JDBAの理念である「自主性」「自己責任」「向上心」を基本とし、年齢・発達に応じた丁寧な技術指導のできる指導者を育てることにより、地域社会から高い信頼を得てドッジボールの普及発展に必ず貢献できると考える。

2014年度の正式発足を目指し、2013年度はインストラクターを主な対象に先行講習会を実施する。（全国9カ所）講習内容の精選、テキストの作成、講師の育成を進める。

新たに「指導委員会」を創設し、全国の優秀な指導者や公認指導者がリーダーとなって指導理念と方法を伝達する。

## 競技者

### シニア(一般)カテゴリー制度スタート

シニアカテゴリーを創設する。

これは、当協会が設立して22年が経過、第1世代（20代後半～30代前半）が親世代となり、保護者として、指導者として活躍する年代に入ったことが背景にある。さらに、再び競技者として活躍したいという要望の高まりもある。

全国規模の大会、アジアカップをはじめとする代表戦は、シニア世代にとってはもちろん、小中学生にとっても憧れでもある。

ドッジボールが真の**競技スポーツ**になるための重要なステップである。



## 競技者

### 普及活動をさらに充実 ～おやこドッジづくり～

実施3年目を迎え、内容を更に充実させる。  
2012年度の実績を踏まえ、新たに専門家の協力を得る。  
大学の協力によるプログラム開発、日本体育協会ジュニアスポーツ指導員講座を活用、専任講師（現在4名）の育成を進める。

2013年度からは、**開催地域の公認指導者（現在のインストラクター）、チーム指導者にも参加を求め、指導ノウハウを伝達、競技者発掘につなげる。**

## 振興と競技力の向上 ～アジア連盟創設～

これまで台湾、中国（北京・天津）、香港、韓国との個別交流を図ってきたものを統合し、アジア全体における競技の普及振興と各国の競技力向上を目的に、5カ国・地域による「アジアドッジボール連盟」を創設する。本年3月に第1回理事会を、12月に第1回アジアカップを日本で開催する。

今後は、選手交流を始め、指導者・審判の研修会等を実施するほか、

**世界中にドッジボールを普及する活動**  
を展開し、将来の「国際ドッジボール連盟」創設に向けた準備を進める。

## 公認審判員の資質向上 ～研修制度改革～

公認審判員の数には**3,200人**余り。1チーム当り3人の計算である。このうち、最上級であるA級が23名、B級が約400名である。全国大会レベルは原則としてA級でジャッジすることになっている。当然、上級を目指す審判員を育成しなければならないし、**合格率を高める**ことが求められている。

同時に、チーム**帯同審判員**としてクラブに密接に関わる人たちの存在にも目を向けねばならない。審判員の技術向上が選手の競技力向上に大いにかかわっているからである。

**審判員中央研修会の目的と内容をあらためて議論し、** 研修制度を改革する年にしたい。